

曖昧さへの態度の多次元構造の検討¹⁾

——曖昧性耐性との比較を通して

西村 佐彩子

九州大学大学院人間環境学府

曖昧さに対する態度は、これまで曖昧性耐性の低さという、否定的態度を中心とした一次元的な観点から論じられてきた。本研究は、曖昧さへの態度を多側面から測定する尺度の作成を行い、適応との関連を検討した。研究1では、曖昧さへの態度尺度の因子分析を行った結果、曖昧さへの態度は、肯定的態度と否定的態度を含んだ、複数の側面（曖昧さの“享受”、“不安”、“受容”、“統制”、“排除”）から構成されることが示された。研究2では、曖昧さへの態度と適応の関連を検討するため、適応の指標として、強迫傾向、抑うつ傾向、愛着スタイルを取り上げた。その結果、強迫傾向、抑うつ傾向、愛着スタイルの不安定型はそれぞれ曖昧さへの否定的態度との関連がみられたが、愛着スタイルの安定型は曖昧さへの肯定的態度との関連がみられた。曖昧さへの態度の各側面によって、適応との関連の仕方が異なることが示された。

キーワード：曖昧さへの態度尺度，多次元構造，曖昧性耐性

問 題

曖昧さへの態度と曖昧性耐性

日常生活には多くの曖昧さが存在している。例えば、初めての仕事で作業の流れが不明確な場面、他者が笑っているけれども本当は何を考えているかわからない場面などの状況には、曖昧さが存在する。Budner (1962) は曖昧さには、新奇性（手がかりが全くない新奇な状況）、複雑性（考慮すべき手がかりが多すぎる複雑な状況）、不可解性（個々の手がかりが異なる事態を指している矛盾した状況）の3つがあるとした。これらはいずれ

も、十分な手がかりがないために適切に構造化やカテゴリー化することができないという特徴がある。本研究ではこれに従い曖昧さを定義する。

人は曖昧さを知覚したとき、不安が喚起されることもあれば、安定して受け入れられることや、おもしろさを発見することもある。このように曖昧さに対するさまざまな態度が存在する。そして、曖昧さにどのような態度をもつかによって、対処の仕方や適応のあり方も異なってくるだろう。これまで曖昧さへの態度については、曖昧性耐性 (Tolerance of Ambiguity)²⁾ という概念を中心に論じられてきた。曖昧性耐性は、刺激の特徴を曖昧さ (ambiguity) という側面からとらえ、それに対する反応の相違を個人差とみなす概念 (今川, 1981) である。この反応にはさまざまなものが考えられ

1) 本論文は、一部を日本心理学会第68回大会で発表したもの、データを追加し加筆修正を行った。調査にご協力頂いた方々に御礼申し上げます。また、本論文の作成に際しご協力とご助言を頂いた九州大学の同僚、ご指導頂いている九州大学の北山修先生に感謝致します。

2) 曖昧さへの寛容さなどの邦訳も用いられるが、本論文では曖昧性耐性という訳に統一して使用する。

る。しかし、実際には曖昧な場面や状況に耐えられるか耐えられないかという反応だけに焦点が当てられてきた。その中でも特に、“曖昧な状況を脅威の源として知覚する傾向 (Budner, 1962)” という曖昧さへの耐えられなさが取り扱われてきた。これは、曖昧性耐性の高低のうちの低さにあたる。

曖昧性耐性の低さは、例えば、権威主義的パーソナリティ (Frenkel-Brunswick, 1949)、不安 (吉川, 1980)、ストレスの評価 (増田, 1998) などの、偏った態度や個人内の不適応につながると考えられている。さらに、不登校児や、うつ病者や強迫神経症者の特徴として、白か黒か式の、ものごとの一面だけをとらえるという、曖昧性耐性の低さが指摘されている (e.g., Kraus, 1977 岡本 1983; 衛藤, 1994; 西村, 2006)。このように曖昧性耐性は、日常場面から臨床場面までを通して利用できる概念として注目されてきた。そして、曖昧さに耐えられない (曖昧性耐性が低い) という、否定的な側面を中心に、曖昧さへの態度がとらえられてきた。

曖昧性耐性を測定する尺度も作成されてきたが (e.g., Rydell & Rosen, 1966; 今川, 1981; 増田, 1998)、いずれも曖昧さへの耐えられなさを問う項目が大部分を占めた、曖昧性耐性の低さを測定する尺度になっている。さらに、一部には曖昧な場面状況に関して分類や限定を試みたものもあるが (Norton, 1975; 友野・橋本, 2005)、多くは対人関係や問題解決などさまざまな場面における曖昧さへの反応について、耐えられる・耐えられないという次元で測定している。

しかし、Furnham (1994) は複数の曖昧性耐性の尺度間で因子構造が異なることを示し、曖昧性耐性が多次元構造をもつ可能性を示唆した。その上で、曖昧性耐性にはっきりとした操作的定義がされておらず、異なる尺度を用いた研究結果を同じものとするのは困難であると指摘している (Furnham & Ribchester, 1995)。また、曖昧性耐性の高さを低さの対極としてのみ処理するのではなく、

多面的に取り扱う必要性が示されている (吉川, 1986)。これらの指摘は、曖昧さへの態度を、耐性という次元でとらえることの限界を示しているのではないだろうか。

曖昧さへの態度の多次元構造

実際に、Budner (1962) は概念的な分類に留まるものの、曖昧な事態への脅威に対する反応を、不可避な事実として事態を認知している“服従”と、知覚者の願望に合致するように事態を変えようとする“否認”に分類している。また、西村・北山 (2001) は、曖昧性耐性を測定する質問紙である Ambiguity Tolerance Scale IV (今川, 1981) について因子分析を行った結果、曖昧さへの反応に“曖昧な状況での不安”と“曖昧さの拒否”の2側面があることを指摘した。ここから、耐性の低さにも複数の側面があることが示唆される。

さらに、先行研究では曖昧性耐性の低さとネガティブな側面の関連をみたものが多く、曖昧性耐性の高さに焦点をあてた研究はわずかである (吉川, 1986)。曖昧性耐性の高さは、曖昧な状況を好ましいものとして知覚する傾向 (Budner, 1962) と定義される。曖昧性耐性の高さは、曖昧さへの肯定的態度の1つといえる。曖昧さへの肯定的態度は不適応を緩和したり、適応を促進する要因にもなり得ると考えられる。曖昧さへの態度について検討する上では、曖昧さへの肯定的態度についても取り上げていく必要があるだろう。しかし、先行研究では曖昧さへの肯定的態度についての見解は不十分であり、曖昧さに対して“脅威と感じず受け入れられる”ことと“好んで関わる”ことが混同されている問題点が指摘できる。植村 (2001) は、新入成員 (異質な他者) という曖昧な対象への反応と曖昧性耐性の高さの関連を検討した。その結果、曖昧性耐性の高さは新入成員 (異質な他者) への拒絶傾向の低さと関連するが、積極的受容とは関連が弱いことが示された。これも、曖昧さへの態度の一側面のみを反映した結果である可能性が考えられる。

以上のように、曖昧さへの態度には区別すべき複数の側面が存在していることが想定される。曖昧さへの否定的態度の中にもいくつかの側面がある。さらに、肯定的な態度も存在するだろう。しかし、曖昧さへの態度について、曖昧性耐性という一次元的な観点から研究が進められてきており、しかも耐性の低さに焦点があてられていたため、重要な側面が区別されないままであることが考えられる。従来指摘されてきた曖昧性耐性との関連要因も、単に曖昧さへの耐性の高低だけではなく、曖昧さに対してどのような態度をもつことが関連するのかを検討することで、より明確な結果を示すことができるのではない。

本研究の目的

そこで本研究では、曖昧性耐性という一次元的な“耐性”ではなく、曖昧さに接したときにどのような評価や志向性が生じるかというさまざまな側面を包括する多次元的な“態度”に注目する。ここで、曖昧さへの態度は“曖昧な刺激の処理において生じる、認知的、情緒的反応パターン”と定義し、その多次元構造を明らかにすることを目的とする。

研究1では、曖昧さに対して生じるさまざまな態度を収集し、それをもとに肯定的・否定的態度の両方を含む尺度を作成し、曖昧さへの態度の構造を明らかにする。その際、既存の曖昧性耐性尺度は場面や状況が特定されており（例：初めて会う人がどんな反応を私に示すかわからないと困る、今日が何日か知っていないと気持ちが悪い；増田，1998），そのため場面の特徴が影響して、曖昧さへの態度の特徴が表れにくかったことが考えられる。これに対して、本研究では曖昧さへの態度の多側面に焦点をあてることを目的とするため、場面の抽象度を高めた尺度を作成する。そして、曖昧性耐性の低さが、曖昧さへの態度のどの側面を説明していたのかを確認する。

また、曖昧性耐性の低さと心理的不適応の関連は示されてきたが、曖昧さへの態度のどの側面が

心理的不適応とつながるかについては明確ではない。そこで研究2では、適応の指標として、これまで曖昧性耐性の低さと関連の指摘されてきた強迫傾向と抑うつ傾向を取り上げ、曖昧さへの態度のどの側面と関連しているのかを検討する。

また、対人関係・社会的ストレス状況でのみ曖昧性耐性の低さとストレス評価・コーピングに関連がみられる（友野・橋本，2002）ことや、他者との相互作用における曖昧さへの耐えられなさに焦点を絞った尺度（友野・橋本，2005）が作成されているように、曖昧さへの耐性が対人関係の持ち方と関連することが示されている。対人場面では、相手の言動や気持ちなど多くの曖昧さが存在し、それはときに不安を喚起する。人が日常生活において不具合を感じるのは、強迫や抑うつのような個人内の不適応だけではなく、対人関係における不安定さのような対人的な不適応も考えられる。対人関係で不安を感じるかどうかに注目したものに、愛着（Bowlby, 1969 黒田他訳 1976）がある。愛着スタイルが不安定型であると、他者との関係で相手がどう思っているかについて過剰な不安を感じたり、逆に全く不安を感じないとされる（Bartholomew & Horowitz, 1991）。従って曖昧さへの態度と愛着スタイルには関連がみられると考えられる。そこで、対人間の適応の指標として愛着スタイルの4類型（Bartholomew & Horowitz, 1991）を取り上げ、その関連についても調べる³⁾。

そして、曖昧さへの各態度が異なる特徴や働きをもつことを示し、曖昧さへの態度を多次元としてとらえる意義について検討する。

3) 強迫傾向や抑うつ傾向といった症状に関連する不適応と、愛着スタイルの不安定型のような対人関係上の不適応では、個人内か対人間かという点では異なるが、本論文ではこれらを、日常生活を問題なく過ごす上で支障を及ぼすという点で、広い意味での不適応状態として捉える。

研究 1

目的

曖昧さへの態度を多側面から測定する“曖昧さへの態度尺度”を作成し、曖昧さへの態度がどのような側面によって構成されているかを検討する。また、作成した尺度の信頼性の検討を行う。さらに、既存の曖昧性耐性を測定する質問紙との相関を調べ、妥当性を検討する。そして、先行研究で用いられてきた曖昧性耐性が、曖昧さへの態度のどの側面を説明し、どの側面の説明が不十分であるのかを確認することを目的とする。

方法

予備調査 曖昧さへの態度尺度の項目を作成するために、曖昧さへのさまざまな反応を収集することを目的とした予備調査を、大学生・大学院生62名（男性26名、女性36名）、平均年齢21.6歳（ $SD=3.10$ ）を対象に行った。(1) 作成した曖昧な状況を示す刺激語に対して、考え方・感じ方・とらえ方を問う文章完成法課題、および(2) 曖昧さについてどう感じるかの自由記述を行い、曖昧さへの反応を収集した。刺激語については、Budner (1962) と Norton (1975) を参考に⁴⁾、“はっきりしていないと”、“いくつかの解釈ができる”、“一貫していないと”、“曖昧な人間関係”など計17刺激語を作成した。

調査は個別配布回収形式で行った。その結果、曖昧さへの反応についてのべ1118反応が得られた。その際、1文につき1反応とした。なお、曖昧さへの反応を、曖昧さへの評価・知覚・志向性

という基準で著者が評価した結果、総反応のうち12%は曖昧さへの反応ではなく曖昧さの内容や知覚頻度についてのものであり、9%は曖昧さへの相反する反応が一文に入っている両義的な態度であったため、尺度項目作成の際には除外した。次に、予備調査で収集した反応に基づいて、尺度項目を作成した。項目は、“(曖昧さ)への(反応)”という文章構成により成り立つようにした(例: はっきりしない状況におかれると不安になる)。その際、刺激語にあたる曖昧さは、Budner (1962) と Norton (1975) の曖昧さの使用例を参考にした、抽象度の高い表現を用いた。これは、本尺度の目的が全般的な曖昧さへの反応傾向を測定することであり、場面の特定性による影響を排除することを考慮した結果である。作成した項目は、著者を含む心理学専攻の大学院生3名による検討により、“曖昧さへの認知的・情緒的な、評価・知覚・意識的な志向性・行動への志向性”という点から、内容的妥当性を確認した。最終的に、計48項目からなる質問紙を作成した。

質問紙 ①曖昧さへの態度尺度：予備調査をもとに作成した48項目からなる。なお、曖昧性耐性が低い人には、中央評定選択によって曖昧さから逃れ不安を解消しようとする性質があることが指摘されている(吉川, 1979)。そこで、本尺度は中央評定値をのぞき、“1. まったくあてはまらない”～“6. 非常にあてはまる”の6件法を評定に用いた。②曖昧性耐性を測定する尺度：心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度(増田, 1998; 以下AT尺度)を、従来の曖昧性耐性を測定する質問紙との相関を調べるために使用した。5件法で評定し、得点が高いほど曖昧さへの耐性が低いことを表す⁵⁾。本尺度を選択したのは、信頼性と妥当

4) 曖昧さの使用例について、Budner (1962) は、新奇性、複雑性、不可解性の3つに分類しており、Norton (1975) は、多義性、漠然性・不完全性・断片的、確率的、非構造的、情報の欠如、不確実性、非一貫性・矛盾・逆説的、不明瞭性の8つに分類している。さらにNorton (1975) は曖昧な状況を、人生観、対人コミュニケーション、公衆イメージ、職業関連、問題解決、社交、習慣、芸術の8つに分類している。

5) 原法は“そうだ”を1点として、得点が低いほど曖昧性耐性が低くなるように作成されている。しかし調査協力者の回答のしやすさとその後の分析での比較しやすさを考慮して、“そうだ”を5点として得点が高いほど曖昧さへの耐性が低くなるようにして用いた。

性が高く、かつ最もよく用いられている曖昧性耐性尺度である MAT50 (Norton, 1975) の中の中心的な性質を取り出した尺度であることと (増田, 1998), 24 項目と項目数が少なく使いやすいためである。AT 尺度が曖昧性耐性の主要因を測定しているとみなした。

調査期間 2003 年 6 月～2005 年 7 月。

調査対象者 A, B, C 大学の大学生 437 名 (男性 222 名, 女性 213 名, 未記入 2 名; 平均年齢 19.7 歳, $SD=1.65$) を対象に曖昧さへの態度尺度に回答してもらった。また, そのうち 48 名 (男性 48 名; 平均年齢 19.1 歳, $SD=1.51$) を対象に, 1 ヶ月の間隔をあけて再検査信頼性の検討のための再調査を実施した。さらに, 妥当性を検討するため, そのうち 230 名 (男性 128 名, 女性 102 名; 平均年齢 20.0 歳, $SD=1.69$) に AT 尺度 (質問紙②) を実施した。

手続き 質問紙調査は講義時間を利用して配布しその場で実施回収, あるいは持ち帰ってもらい後日講義内で回収を行った。調査への協力は任意とし, 質問紙には個人が特定されないことを明記した。

結果と考察

曖昧さへの態度尺度の因子分析 48 項目の質問項目について因子分析を行った。因子の抽出には重み付けのない最小二乗法を用い, スクリーンプロットを参照しながら分析を行った。その結果, 因子の解釈可能性から 6 因子解とし, プロマックス回転を行った。因子負荷量が .40 に満たない項目および複数因子で因子負荷量が .40 を超えた項目を削り再度分析を行った。その経過において 2 項目となった第 6 因子は削除し, 最終的に 5 因子 26 項目からなる“曖昧さへの態度尺度”を作成した。最終的な因子分析結果の因子負荷量および因子間相関を Table 1 に示した。

第 1 因子は, “いろいろな可能性がある”と, “すべてを試してみたくなる”などの項目からなり, 曖昧さを魅力的なものとして評価し, 関与していくこと

に楽しみを見出す傾向と考えられるため, “曖昧さの享受 (以下, 享受)”とした。第 2 因子は, “はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる”などの項目からなり, 曖昧さに不安などの情緒的混乱と, それに伴う対処の難しさを感じる傾向を表していると考えられ, “曖昧さへの不安 (以下, 不安)”とした。第 3 因子は, “はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある”などの項目からなり, 曖昧さをそのまま認めて受け入れられる, 曖昧さへの親和性や寛容さを表すと考えられ, “曖昧さの受容 (以下, 受容)”とした。第 4 因子は, “情報がたりないと動きづらいので, できるだけ情報を集めたい”などの項目からなり, 曖昧な状況を否定的に評価し, 知的に把握・対処 (統制) しようとする傾向と考えられ “曖昧さの統制 (以下, 統制)”とした。これは, 情緒的な否定的態度である “不安” に対し, 認知的な否定的態度と考えられる。第 5 因子は “どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ”などの項目からなり, 曖昧さを認めず, 排除して白黒つけたい傾向と考えられるため, “曖昧さの排除 (以下, 排除)”とした。

因子間相関は, 曖昧さを認めて受け入れる “受容” と曖昧さ自体を認めず拒否する傾向である “排除” に -0.52 の負の相関がみられた。また, 否定的態度の側面では, “不安” と “統制” に $.38$ の正の相関がみられたが, “不安” と “排除” はほとんど相関がみられなかった。曖昧さに情緒的に脅威を感じるからといって, 必ずしも曖昧さを排除していこうとするわけではないといえる。肯定的態度である “享受” と否定的態度である “統制” にも $.38$ の正の相関がみられたが, これはどちらも曖昧さを認めるとそれに関与していこうとする傾向を含んでいるためと考えられる。

以上の因子間にはある程度の相関がみられたが, 各下位因子は, 曖昧さへの態度の異なった側面を表していると考えられる。曖昧さへの態度は高低の一次元上でとらえることはできず, 各態度側

Table 1 曖昧さへの態度尺度の因子分析結果

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
第1因子 曖昧さの享受					
いろいろな可能性がある、すべてを試してみたい。	.780	.057	-.157	-.140	.013
いくつかの解釈ができると、いろんな角度からものごとを見れる点では自由な感じがする。	.594	.040	.148	.024	-.067
見たことがないものには想像力をかき立てられる。	.592	-.014	-.026	-.190	.050
いろいろな可能性があると選べるのでうれしい。	.587	.023	.066	-.033	.019
見たことがないものは見ておくにこしたことはない、ぜひ見てみたい。	.541	-.012	.097	.117	.081
不完全なことは完全にしていくプロセスがあっておもしろい。	.478	.013	.071	.073	.073
いくつかの解釈ができると、視野や可能性が広がっていくのでおもしろい。	.475	-.046	.067	.047	-.122
第2因子 曖昧さへの不安					
はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる。	.007	.747	.001	.046	.015
見たことがないものに出会うと怖くなる。	-.117	.612	.097	-.016	.035
見たことがないものにすぐに近寄るのは抵抗がある。	-.214	.611	.108	-.002	.091
はっきりしない状況におかれると不安になる。	.072	.592	-.142	.036	-.050
いろいろな可能性がある、選ぶのに時間がかかって迷う。	.278	.516	-.083	.042	-.105
情報が多すぎると、かえって頭が混乱してしまう。	.070	.475	.052	-.097	.026
第3因子 曖昧さの受容					
はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある。	.105	.149	.642	.027	-.027
不完全なままにしておいた方がよい時もある。	.026	.040	.637	.129	-.127
不完全なことがあるからおもしろい。	.379	-.105	.607	-.084	.073
不完全なところも、ある程度受け入れられる。	.046	-.130	.553	.071	.098
はっきりしていないことがあっても、そのままにしておくのがいい。	-.186	-.089	.525	-.094	-.055
第4因子 曖昧さの統制					
情報がたりないと動きづらいため、できるだけ情報を集めたい。	-.117	-.090	.102	.841	-.044
情報がたりないと正確な判断はできない。	-.084	.090	.139	.528	-.034
確実でないところは確認して明らかにしたい。	.161	.070	-.170	.498	.065
いろいろな可能性がある時には、さまざまなことを考慮して対処法を考えておきたい。	.330	-.048	-.105	.492	-.063
一貫していないことには信頼がおけない。	-.121	.016	-.010	.471	.185
第5因子 曖昧さの排除					
どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ。	-.053	-.065	.052	-.019	.812
どっちつかずであることはよくないと思う。	.028	.103	-.036	-.035	.725
はっきりしないことはできるだけ白黒つけたい。	.119	.010	-.080	.138	.599
因子間相関					
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
因子1		-.11	.15	.38	.13
因子2			-.06	.38	.04
因子3				-.10	-.52
因子4					.26

面の特徴を検討していくことが必要であるといえるだろう。

下位尺度の基本統計量 下位尺度ごとに“まったくあてはまらない”を1点“非常にあてはまる”を6点として合計得点を算出した。得点が高いほど各因子の傾向が強いことを示す。下位尺度得点の平均値と標準偏差をTable2に示した。

Table 2 曖昧さへの態度尺度の基本統計量

	享受	不安	受容	統制	排除
平均値	30.06	23.95	19.35	21.36	11.04
標準偏差	4.94	4.51	3.86	3.36	2.85
α 係数	.78	.75	.74	.71	.78
再検査信頼性	.73	.76	.59	.64	.72

信頼性の検討 尺度の信頼性を検討するため、下位尺度の Cronbach の α 係数を算出したところ、すべての下位尺度で .70 以上の値がみられ、ほぼ満足のいく内的整合性を有しており信頼性が確認された。

また、調査対象者数が少ないため補足的な資料にとどまるが、1ヶ月の間隔をあけた1回目と2回目の調査における、曖昧さへの態度下位尺度の得点間の相関係数を算出した。 $r=.59\sim.76$ となり、“受容”と“統制”の相関係数がやや低いものの、ある程度の再検査信頼性がみられた。各下位尺度の α 係数と再検査信頼性の相関係数を Table 2 に示した。

曖昧さへの態度と曖昧性耐性の相関 曖昧さへの態度尺度と AT 尺度の相関係数を Table 3 に示した。AT 尺度と、“不安”“統制”“排除”に有意な正の相関が、“受容”に有意な負の相関がみられた。特に、“不安”との相関係数は .51 であり、曖昧性耐性の低さと関連する中心的な態度側面は“不安”であることが示唆された。さらに、“統制”“排除”が加わり、従来の曖昧性耐性の低さの側面を構成していると考えられる。ただし、これら2因子と AT 尺度の相関係数の値は高くはなかった。その理由として、これまで曖昧性耐性の低さを取り上げるとき、不適応につながる耐性の低さに焦点があてられてきたことが考えられる。つまり、曖昧さへの否定的態度の中でも、“不安”が特に不適応につながりやすい態度である可能性がある。先行研究では、たとえば抑うつなどの関連要因と曖昧性耐性の関連が示されているが、これは主に曖昧さへの態度の“不安”の側面が反映された結果であるだろう。

また、“受容”が AT 尺度と負の関係を示していた。適応につながる曖昧性耐性の高さとして、先行研究で示唆されてきた曖昧さへの態度は、“享受”ではなく、“受容”の側面と考えられる。しかし、これも相関係数は低く、これまでの曖昧性耐性の測定法の中では十分に扱われてこなかった

Table 3 曖昧さへの態度尺度得点と AT 尺度の相関係数

	享受	不安	受容	統制	排除
AT 尺度	-.11	.51***	-.19**	.27***	.25***

** $p<.01$ *** $p<.001$

のだろう。曖昧さへの態度の中で“享受”のみ AT 尺度との有意な相関がみられなかった。“享受”は従来の曖昧性耐性の尺度の中では測定されていなかった新しい側面であると考えられる。しかし、“享受”の曖昧さを魅力的にとらえ関与していく傾向は、曖昧な状況を好ましいものとして知覚する傾向 (Budner, 1962) という曖昧性耐性の高さの定義と一致する。本研究の結果からは、曖昧性耐性の高さ・低さとして一次元で説明されていた態度には、実際は複数の異なる態度が含まれていると考えられる。曖昧性耐性という耐性の高さや低さを一次元で想定していた従来の測定法では、曖昧さへの態度を把握することは困難であることを示しているだろう。

これまで曖昧さへの態度は、“脅威の源として曖昧な状況を知覚する傾向 (Budner, 1962)”という定義に代表される、曖昧性耐性の低さに焦点があてられていたため、一次元として扱われてきた。本研究では、曖昧さへの態度について多次元構造を想定した上で、因子分析を用いてその態度構造を検討した。その結果、複数の因子が抽出され、曖昧な刺激に対して生じる態度は、脅威か否かという一次元ではなく、多様な態度が存在すると考えられた。耐性という概念だけでこれらの態度を説明、測定することは難しい。曖昧さへの態度という視点から、多次元構造として整理していくことが有用であることが示唆された。

研究 2

目的

曖昧さへの態度の各側面の特徴を示すために、心理的適応との関連について調べる。特に、心理的不適応の指標として、強迫傾向、抑うつ傾向、

愛着スタイルを取り上げ、曖昧さへの態度のどの側面と関連しているのかを検討する。その際、曖昧さへの否定的態度だけではなく、肯定的態度にも焦点をあてる。なぜなら、曖昧さへの肯定的態度は不適応を緩和したり適応を促進する可能性が考えられるからである。

各要因と曖昧さへの態度には、以下の関連が予測される。

強迫傾向 確認行為などの強迫症状は、不安を生じさせる曖昧さを減少させようとしている状態といえる。Salzman (1968 成田・笠原訳 1985) は、このような症状行為は強迫性格から展開されるとしている。強迫性格の特徴として、コントロールを喪失する不安や無力感があり、その防衛としてさらにコントロールを求める傾向が指摘されている。強迫傾向が強いと、曖昧さに対して不安な態度を持ちやすいだろう。またその防衛として曖昧さを統制しようとする事が予測できる。

抑うつ傾向 抑うつの病前性格として強迫性格が指摘されており (e.g., Salzman, 1968 成田・笠原訳 1985), 曖昧さへの態度は抑うつ傾向とも関連すると考えられる。増田 (1998) は MAT-50 に因子分析を行い、第1因子に高い負荷をもつ項目を中心とした AT 尺度のみが、抑うつと関連することを示した。したがって、抑うつ傾向は曖昧さへの態度の中でも、曖昧性耐性と関連の強さが示された曖昧さへの不安の態度側面と関連することが予測される。

愛着スタイル 不安定型の愛着スタイルは曖昧さへの否定的な態度と関連すると考えられる。Bartholomew & Horowitz (1991) は愛着スタイルを安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型の4つにわけた。Brennan, Clark, & Shaver (1998) は、愛着スタイルを親密さへの不安と回避という二次元で構成されると説明している。それによると、とらわれ型は相手が自分のことをどう思うかという不安が高い。そのため、曖昧さへの態度においても不安をもちやすいと予測できる。拒絶型は不安を防

衛するために親密な関係を回避する傾向があるため、脅威となりえる曖昧さについても排除しようとする態度が予測される。恐れ型は不安と回避の両方の傾向をもつため、どの態度が強く表れるかを探索的に検討する。また、安定型は不安が低く回避しにくいいため、安定して曖昧さに関与できると考えられる。そのため肯定的な態度をもつことができるだろう。

方法

調査対象者・期間 強迫傾向は、2003年6~7月にA大学の学生236名(男性132名,女性104名;平均年齢20.0歳, $SD=1.68$)から回答を得た。抑うつ傾向は、2005年7月~2006年3月にB大学の学生・D専門学校生134名(男性82名,女性52名;平均年齢19.2歳, $SD=1.65$)から回答を得た。愛着スタイルは、2004年12月~2005年6月にB大学とC大学の学生147名(男性69名,女性78名;平均年齢20.0歳, $SD=1.39$)から回答を得た。なお、A,B,C大学生は研究1の曖昧さへの態度尺度作成の調査にも参加していた。

質問紙 ①曖昧さへの態度尺度:研究1で作成した尺度を使用した。②強迫傾向を測定する尺度: Maudsley Obsessional Compulsive Inventory 邦訳版(吉田・切池・永田・松永・山下, 1995; 以下 MOCI)を用いた。MOCIは30項目の尺度であり、総得点を強迫傾向の指標として用いた⁶⁾。2件法で評定し、得点が高いほど強迫傾向が高いことを表す。本調査での尺度全体の α 係数は.77であった。③抑うつ傾向を測定する尺度: Self-rating Depression Scale 日本語版(福田・小林, 1973; 以下 SDS)を用いた。死という言葉が学生に与える影響を配慮して、希死念慮項目を除いた19項目を用いた。4件法で評定し、得点が高いほど抑うつ傾向が高いことを表す。本調査での尺度

6) MOCIは、確認・清潔・優柔不断・疑惑の下位尺度からなるが、本調査での α 係数を算出したところ、 $\alpha=.41\sim.67$ と低かったため、総得点のみを強迫傾向の指標として用いた。

Table 4 曖昧さへの態度尺度得点と MOCI, SDS の相関係数

	享受	不安	受容	統制	排除
MOCI	.02	.29***	-.13*	.15*	.00
SDS	-.07	.30***	.01	.01	.01

* $p < .05$ *** $p < .001$

全体の α 係数は .68 であった。④愛着スタイルを測定する尺度：Relationship Questionnaire 日本語版（加藤，1999）を用いた。“安定型”“拒絶型”“とらわれ型”“恐れ型”の4つの愛着スタイルの特徴を記述した文章のうち、最もあてはまるものを選択することで愛着スタイルが決定される。

手続き 研究1と同様の手続きをとった。

結果と考察

曖昧さへの態度と強迫傾向の関連 曖昧さへの態度尺度と MOCI の相関係数を Table 4 に示す。“不安”は MOCI と有意な正の相関がみられた。さらに、値は低いが、“統制”との間に有意な正の相関が、“受容”との間に有意な負の相関がみられた。

有意な相関はみられたものの、“統制”・“受容”と MOCI の相関係数の値は低かった。そこで参考までに、“統制”と“受容”について下位尺度得点の上位4分の1（高群）、下位4分の1（低群）の調査対象者の MOCI の平均値を t 検定で比較した⁷⁾。その結果、“統制”において高群が有意に MOCI の値が高かった ($t(112)=2.44, p < .05$)。また、有意傾向であるが、“受容”では高群が MOCI の値が低かった ($t(109)=1.82, p < .10$)。相関と同様の傾向がみられることが確認された。

以上の結果より、曖昧さへの態度の中でも、曖昧さへの不安が強迫傾向に最も関連している態度といえる。“統制”は曖昧さを知的に把握してコ

ントロールしようとする傾向であり、統制できないものを過度に統制しようとしているときに、強迫的な状態といえるだろう。これらの結果は、強迫傾向が“不安”と“統制”の態度側面と関連があるという予測と一致している。一方、曖昧さへの否定的な態度の中でも“排除”とは有意な関係がみられなかった。曖昧さを排除した状態は、強迫への防衛がなりたっている状態かもしれない。また、“受容”において強迫傾向と弱い負の関係がみられた。不安を心の中に置いておけず、否認・取消そうとする現れが強迫行為であるが（成田，1994）、曖昧さを認めても受け入れられる態度が強迫傾向を緩和すると考えられる。

曖昧さへの態度と抑うつ傾向の関連 曖昧さへの態度尺度と SDS の相関係数を Table 4 に示す。SDS と有意な相関がみられたのは“不安”のみであった。

抑うつ傾向は曖昧さへの否定的態度の中でも“不安”との関連が強いといえる。AT 尺度は SDS と .27 の有意な相関があり、曖昧性耐性尺度の中でも心理的健康と関連する部分を取り出していることとされる（増田，1998）。“不安”と SDS の相関係数は .30 であり、AT 尺度と SDS の相関と同程度の値を示した。態度という側面からみること、心理的健康との関連を、より焦点をしばって取り出すことができると考えられる。

曖昧さへの態度と愛着スタイルの関連 愛着スタイルを独立変数、曖昧さへの態度下位尺度得点を従属変数とした1要因分散分析を行った⁸⁾。愛着スタイルにおける曖昧さへの態度下位尺度の平均値を Table 5 に示す。その結果、“享受”“不安”“受容”において有意差がみられた ($F(3, 143)=3.26, p < .05$; $F(3, 143)=5.11, p < .01$; $F(3, 143)=4.00, p < .01$)。Tukey の HSD による多重比較の結果、

7) 各群の人数と MOCI の平均値は以下の通りである。統制高群 ($N=53$)=10.21 ($SD=4.13$)、統制低群 ($N=61$)=8.26 ($SD=4.33$)。受容高群 ($N=52$)=8.35 ($SD=4.15$)、受容低群 ($N=59$)=9.83 ($SD=4.40$)。

8) Relationship Questionnaire の性質上、愛着は独立変数にしか用いられないためこの分析を採用した。しかし、実際は曖昧さへの態度と愛着は相互に関連する要因であると考えられる。

Table 5 愛着スタイルにおける曖昧さへの態度尺度得点

	愛着スタイル				下位検定結果
	安定型 N=46	拒絶型 N=9	とらわれ型 N=71	恐れ型 N=21	
享受	32.26 (4.61)	30.11 (6.68)	29.48 (4.59)	30.95 (4.71)	安定>とらわれ*
不安	22.43 (4.89)	21.11 (6.11)	25.32 (3.95)	23.90 (4.72)	とらわれ>安定**, 拒絶*
受容	17.93 (3.93)	15.33 (4.36)	18.27 (3.70)	20.38 (3.84)	恐れ>拒絶**
統制	22.07 (3.87)	21.11 (2.52)	21.35 (2.70)	22.14 (3.90)	
排除	12.28 (3.07)	11.44 (3.75)	11.41 (2.49)	10.86 (2.22)	

()は標準偏差 * $p<.05$ ** $p<.01$

“享受”では安定型がとらわれ型より有意に得点が高かった ($p<.05$)。“不安”ではとらわれ型が安定型、拒絶型より有意に得点が高かった ($p<.01$; $p<.05$)。“受容”では恐れ型が拒絶型より有意に得点が高かった ($p<.01$)。

以上の結果は、とらわれ型が曖昧さに不安を感じやすく、安定型が不安を感じにくく肯定的態度を持ちやすいという予測を支持している。“享受”については、安定型がその態度をもちやすかった。安定型は不安を感じにくく、曖昧さに安定して関与していくことができるため、肯定的な態度を持ちやすくなることを示唆しているといえる。

また、“不安”の態度は、拒絶型でも低かった。これは、拒絶型が不安を感じにくい傾向を反映していると考えられる。一方で、拒絶型と“排除”の関係の予測は支持されなかった。拒絶型にとって重要なのは不安な状況の回避であり、曖昧さの排除にまでは至らないのかもしれない。

さらに、恐れ型が拒絶型よりも“受容”の態度を持ちやすいことも示された。肯定的な側面と考えられる“受容”と不安定型である恐れ型が関連することは予測を支持していない。恐れ型は曖昧さを受け入れられるという点では適応的である可能性がある。しかしながら、恐れ型の特徴として、拒絶されることへの恐怖をもち、自分を主張でき

ないところがある。曖昧性耐性が高いもしくは高すぎるということは、曖昧さを減少させようという動機が欠如していたり、曖昧さに対して実際的な行動がとれない(吉川, 1980)場合もあるだろう。このように、恐れ型の“受容”は、脅威となり得る曖昧さに対する受動的な態度であるかもしれない。その場合適応的とはいえない可能性がある。

総合考察

これまで、曖昧さへの態度は曖昧性耐性を中心に論じられてきた。本論文では、曖昧さへの態度の多次元構造について整理を試みた。曖昧さへの反応を収集し、尺度作成を行った。その結果、曖昧さへの態度に“享受”“不安”“受容”“統制”“排除”の5つの側面を見出した。従来は曖昧さへの態度は、否定的態度を中心に論じられることが多かったが、本尺度は曖昧さへの肯定的態度も含んでいた。これらの側面は、曖昧性耐性という次元を想定した視点からは説明することができず、曖昧さへの態度を多次元的にとらえることが有効であることが示唆された。ただし、本尺度は“排除”の項目数が少ないため“排除”の側面が十分に反映されているとは限らない。今後は、項目数を増やすことも必要だろう。

また、曖昧さへの態度の各側面は、心理的適応

要因との関連の仕方でも区別された。このことから、各態度側面の特徴が異なることが示唆された。曖昧さへの否定的態度、中でも“不安”が、心理的不適応との関連が強かった。また、“統制”は強迫傾向と関連がみられたが、抑うつ傾向ではみられなかった。ここから、曖昧さへの否定的態度全体が心理的不適応につながるわけではないと考えられる。さらには、強迫傾向を緩和する態度としての“受容”、愛着スタイルの安定型（適応的なスタイル）に“享受”の態度がみられやすいというように、曖昧さへの肯定的態度が適応の促進に関連することも示唆された。曖昧さへの各態度側面によって、心理的適応に与える影響は異なるといえる。今後の課題として、他の適応の指標との関連も検討し、各態度側面の特徴をさらに明確にしていく必要があるだろう。たとえば、愛着スタイルの拒絶型についても、愛着スタイルの中に占める割合は低く（加藤，1999）本調査でも少なかったため、人数を増やして再度検討することで、より特徴が示されるだろう。

強迫傾向の低い一群に“受容”の態度がみられたことから、“受容”は不適応を緩和する態度と考えられる。しかし同時に、不適応といわれる恐れ型にも“受容”の態度がみられるという、矛盾した結果がみられた。これについては、たとえば“不安”など、他の曖昧さへの否定的な態度側面との関係が関与しているのかもしれない。“受容”は曖昧さをそのまま受け入れる態度である。その際、たとえば“不安”の態度が高い場合と低い場合では、曖昧さを受容したときに、曖昧さを安定して受け入れられるか、それとも曖昧さが脅威となるのに避けられずに受動的に受け入れてしまい不安定になるかという点で異なってくると考えられる。実際に、強迫傾向の低い人は“受容”が高いだけでなく、有意に“不安”も低かった。すなわち、ただ曖昧さを受容すればいい（受容することが適応的である）というわけではないことが考えられる。曖昧さへの態度を1つの側面からの

みでとらえるのではなく、肯定的態度と否定的態度のバランスなど、複数の側面を考慮していくことも、今後の課題である。

引用文献

- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss*. Vol. 1. *Attachment*. New York: Basic Books.
 (ボウルビィ, J. 黒田実郎他(訳) (1976). 母子関係の理論 I 岩崎学術出版社)
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson, & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press. pp. 46-76.
- Budner, S. (1962). Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, **30**, 29-50.
- 衛藤順子 (1994). 強迫神経症における Intolerance of Ambiguity (曖昧さに対する非耐性) 東北福祉大学研究紀要, **19**, 155-164.
- Frenkel-Brunswik, E. (1949). Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of Personality*, **18**, 108-143.
- 福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- Furnham, A. (1994). A content, correlational and factor analytic study of four tolerance of ambiguity questionnaires. *Personality and Individual Differences*, **16**, 403-410.
- Furnham, A., & Ribchester, T. (1995). Tolerance of ambiguity: A review of the concept, its measurement and applications. *Current Psychology: Developmental, Learning, Personality, Social*, **14**, 179-199.
- 今川民雄 (1981). Ambiguity Tolerance Scale の構成 (1) — 項目分析と信頼性について — 北海道教育大学紀要第一部 C 教育科学編, **32**, 79-93.
- 加藤和生 (1999). Bartholomew らの 4 分類成人愛着尺度 (RQ) の日本語版の作成 認知・体験過程研究, **7**, 41-50.
- Kraus, A. (1977). *Sozialverhalten und Psychose Manisch-Depressiver*. Stuttgart: Enke.
 (クラウス, A. 岡本 進 (訳) (1983). 躁うつ病と

- 対人行動 みすず書房)
- 増田真也 (1998). 曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響 茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学・芸術), **47**, 151-163.
- 成田善弘 (1994). 強迫症の臨床研究 金剛出版
- 西村佐彩子 (2006). 曖昧性耐性からみたクライアントの理解とその関わり方 心理臨床学研究, **24**, 221-231.
- 西村佐彩子・北山 修 (2001). メタファー理解における文脈生成とあいまい性耐性の影響についての研究 九州大学心理学研究, **2**, 107-116.
- Norton, R. W. (1975). Measurement of ambiguity tolerance. *Journal of Personality Assessment*, **39**, 607-619.
- Rydell, S. T., & Rosen, E. (1966). Measurement and some correlates of need-cognition. *Psychological Reports*, **49**, 139-165.
- Salzman, L. (1968). *The obsessive personality, origins, dynamics and therapy*. New York: Jason Aronson, Inc.
- (サルズマン, L. 成田善弘・笠原 嘉(訳) (1985). 強迫パーソナリティ みすず書房)
- 友野隆成・橋本 宰 (2002). あいまいさへの非寛容がストレス事象の認知的評価及びコーピングに与える影響 性格心理学研究, **11**, 24-34.
- 友野隆成・橋本 宰 (2005). 改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み パーソナリティ研究, **13**, 220-230.
- 植村善太郎 (2001). あいまいさへの耐性と集団同一性が新入成員への寛容的反応に及ぼす効果 性格心理学研究, **10**, 27-34.
- 吉田充孝・切池信夫・永田利彦・松永寿人・山下榮 (1995). 強迫性障害に対する Maudsley Obsessional Compulsive Inventory (MOCI) 邦訳版の有用性について 精神医学, **37**, 291-296.
- 吉川 茂 (1979). 評定尺度における二分化と Ambiguity Tolerance 臨床教育心理学研究, **5**, 1-6.
- 吉川 茂 (1980). Ambiguity Tolerance の程度と適応性 関西学院大学教育学科研究年報, **6**, 35-39.
- 吉川 茂 (1986). 曖昧さへのトレランス-イントレランスの基本的相違点に関する研究 関西学院大学人文論究, **35**, 94-121.

— 2006.4.27 受稿, 2006.8.22 受理—

Multi-dimensional Structure of Attitudes towards Ambiguity

Sayako NISHIMURA

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007, Vol. 15 No. 2, 183-194

Research on attitudes towards ambiguity has centered around intolerance of ambiguity, which saw the attitudes as negative and one-dimensional. The purposes of this study were to develop a scale to measure attitudes towards ambiguity from multi-dimensional view, and to examine the relationship between the attitudes and adaptation. In Study 1, factor analysis was performed to examine factor structure of Attitudes towards Ambiguity Scale. Results showed that the attitudes consisted of the following multiple aspects, which were both positive and negative: enjoyment, anxiety, reception, control, and exclusion. In Study 2, to examine the relationship between them and adaptation, we investigated obsessive compulsive and depressive tendencies, as well as attachment styles in adaptation index. Results showed that negative attitudes towards ambiguity had a correlation with each of the followings: obsessive compulsion, depression, and insecure attachment style. In addition, the positive ones showed a correlation with secure attachment style. In conclusion, different aspects of attitudes towards ambiguity showed different patterns of relationship with adaptation.

Key words: Attitudes towards Ambiguity Scale, multi-dimensional structure, tolerance of ambiguity